

研究紀要

第32号

中井遺跡における縄文中期の食用植物について
—レプリカ法による土器種実圧痕の同定—

上野真由美
佐々木山香

網目状撚糸文の観察（1）

魚水 環

古墳時代前期の「外來系木製品」について
—反町遺跡出土の籠と籠脚をめぐって—

福田 聖

埼玉県における古墳時代前期の玉作り

赤熊 浩一

焼失住居から見る古墳時代前期の植物利用

滝澤 誠

高橋 敦

後・終末期群集墳と集落の展開について
—日沼古墳群と横野地北遺跡の関係—

青木 弘

須恵器工人の瓦づくり—泥条盤築技法導入の背景—

星間 孝志

ほるたまセミナー特別講演録
「東国の出現期古墳と大和政権」

大塚 初重

2018

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

口絵

序

- 中井遺跡における縄文中期の食用植物について 上野真由美・佐々木由香 (1)
—レプリカ法による土器種実圧痕の同定—
- 網目状撚糸文の観察 (1) 魚水 環 (13)
- 古墳時代前期の「外来系木製品」について 福田 聖 (21)
—反町遺跡出土の籠と籠脚をめぐって—
- 埼玉県における古墳時代前期の玉作り 赤熊 浩一 (33)
- 焼失住居から見る古墳時代前期の植物利用 滝澤 誠・高橋 敦 (45)
- 後・終末期群集墳と集落の展開について 青木 弘 (61)
—目沼古墳群と横野地北遺跡の関係—
- 須恵器工人の瓦づくり—泥条盤築技法導入の背景— 昼間 孝志 (79)
- ほるたまセミナー特別講演録「東国の出現期古墳と大和政権」 大塚 初重 (93)

後・終末期群集墳と集落の展開について —目沼古墳群と楳野地北遺跡の関係—

青木 弘

要旨 本稿では、杉戸町目沼古墳群と集落遺跡である幸手市楳野地北遺跡を取り上げ、関東地方で数多く営まれる後・終末期群集墳が、どのような地域的基盤で形成されたのかを検討する。

目沼古墳群と楳野地北遺跡は下総台地北西部に所在し、指呼の距離に位置する。両遺跡とも近年の調査により、古墳時代中期後半から、古墳の造営と集落の形成が活発化することが明らかになった。目沼古墳群の後期段階の特徴である、下總型埴輪や房州石がもたらされる基盤として、集落では中期後半以来、房総地域を代表とする東関東系の土師器や貝果穴痕泥岩が認められる点が挙げられる。終末期における角閃石安山岩や緑泥石片岩を用いた横穴式石室の構築に対しては、集落でも、群馬県南牧村砥沢産の流紋岩や利根川流域の転石である角閃石安山岩の砥石等が出土しており、利根川や荒川を介した交流が活発だったことが窺われる。その反面、常総型甕等の増加から、常総地域との交流も顕在化していた。

目沼古墳群の造営の背景には、楳野地北遺跡のような古墳群の形成に呼応するように集落規模を拡大し、他地域との交流も盛んに進める事のできる集団が存在していたと推定される。両遺跡の展開から、この下総台地南西部を拠点とした、北武藏、下総、下野、上野といった、様々な地域との交流を基盤とした地域社会の形成が読み取れる。

はじめに

埼玉県幸手市に所在する楳野地北遺跡は、平成25年度から平成26年度にかけて、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」）による発掘調査が実施され、平成29年度に発掘調査報告書（以下「報告書」）が刊行された（青木2017）。楳野地北遺跡では、主に古墳時代から奈良・平安時代にかけての堅穴住居跡が、本地域としては比較的数多く検出され、集落の様相を窺える成果が得られた。

この楳野地北遺跡の南方の約1kmには、杉戸町目沼古墳群が分布する（第1図・第2図）。埼玉県東部では数少ない群集墳である。

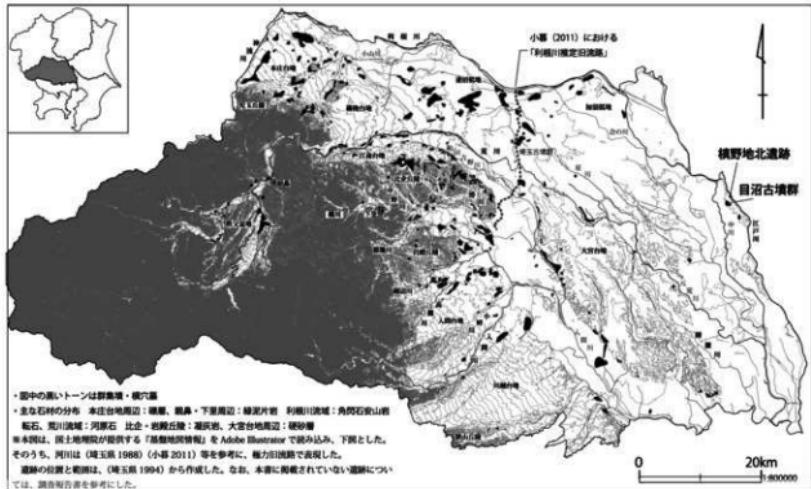
本稿では楳野地北遺跡と目沼古墳群の成立と展開について注目し、両者の関係性の有無を捉え、古墳の造営と集落の形成という古墳時代に通底するテーマを検討する予察としたい。

1 楳野地北遺跡について

1-1 遺跡の概要

楳野地北遺跡は埼玉県幸手市大字楳野地に所在し、南北約450m、東西約450mの範囲に広がる。その一部は幸手市教育委員会による第1次・2次調査、事業団による第3次・4次調査として発掘された。

この遺跡は下総台地宝珠花支台の北西端に立地する（第2図）。第2図には遺跡周辺の地形と遺跡を掲載した。楳野地北遺跡の西側には幸手市楳野地西遺跡、南側には幸手市No.14・15遺跡、幸手市楳野地原遺跡、そして目沼古墳群が分布する。このうち、発掘調査の行われた楳野地原遺跡と目沼古墳群を除いて、具体像は明らかではない。楳野地原遺跡では、古墳時代に関する成果として、古墳時代前期の住居跡が検出された（砂生2016）。



第1図 埼玉県における楳野地北遺跡と目沼古墳群の所在

楳野地北遺跡周辺の地形を細かくみると、第3次調査区と第4次調査区との間や、楳野地原遺跡との間などに、小さな谷底平野や凹地（＝谷津）が入ることがわかる。さらに台地の西側には、自然堤防が北から南にかけて分布し、旧河道が南流していたことも推定されている。

このように谷が細かく入りこむものの、各遺跡は台地上に立地し、比較的高所に形成されたことが窺われる。

さて、第3次調査では、縄文時代の竪穴住居跡2軒・炉穴8基、古墳時代の竪穴住居跡33軒、奈良時代の竪穴住居跡4軒、中・近世以降の掘立柱建物跡1棟・井戸跡4基・溝跡2条・土壙64基のほか、ピット301基が検出された（第3図）。

古墳時代については33軒の竪穴住居跡が確認された。これらの住居跡は、調査区の中央から南側にかけて分布する。本調査区は微高地に位置するが、そのなかでもより標高が高く、安定した平坦面に住居跡が集中する傾向がみられる。

古墳時代の竪穴住居跡の時期別内訳は、時期不

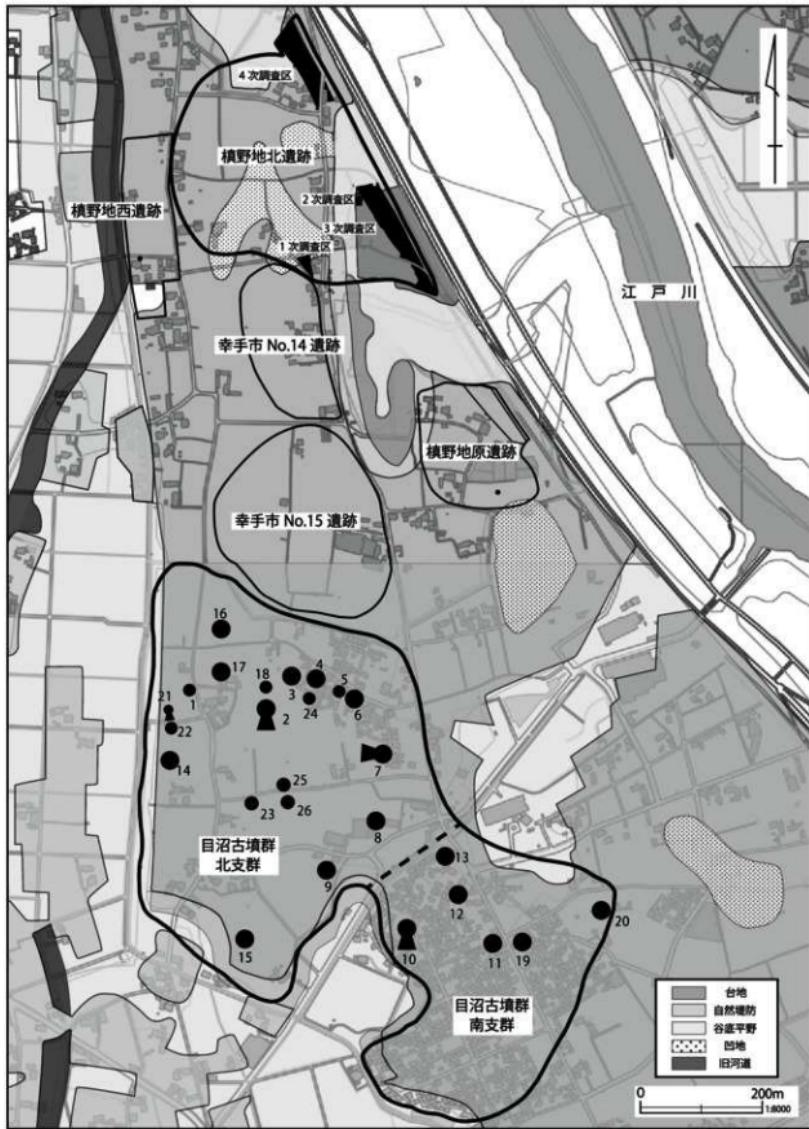
詳の1軒を除くと、前期が10軒、中期が5軒、後期が13軒、7世紀以降が4軒である。

第4次調査では、縄文時代の竪穴住居跡1軒・土壙7基・炉穴21基、古墳時代の竪穴住居跡20軒・土壙4基、奈良時代の竪穴住居跡5軒・井戸跡1基・土壙1基、平安時代の竪穴住居跡2軒、中・近世以降の掘立柱建物跡3棟・井戸跡3基・溝跡7条・土壙113基・畠跡1箇所のほか、ピット177基が検出された（第4図）。

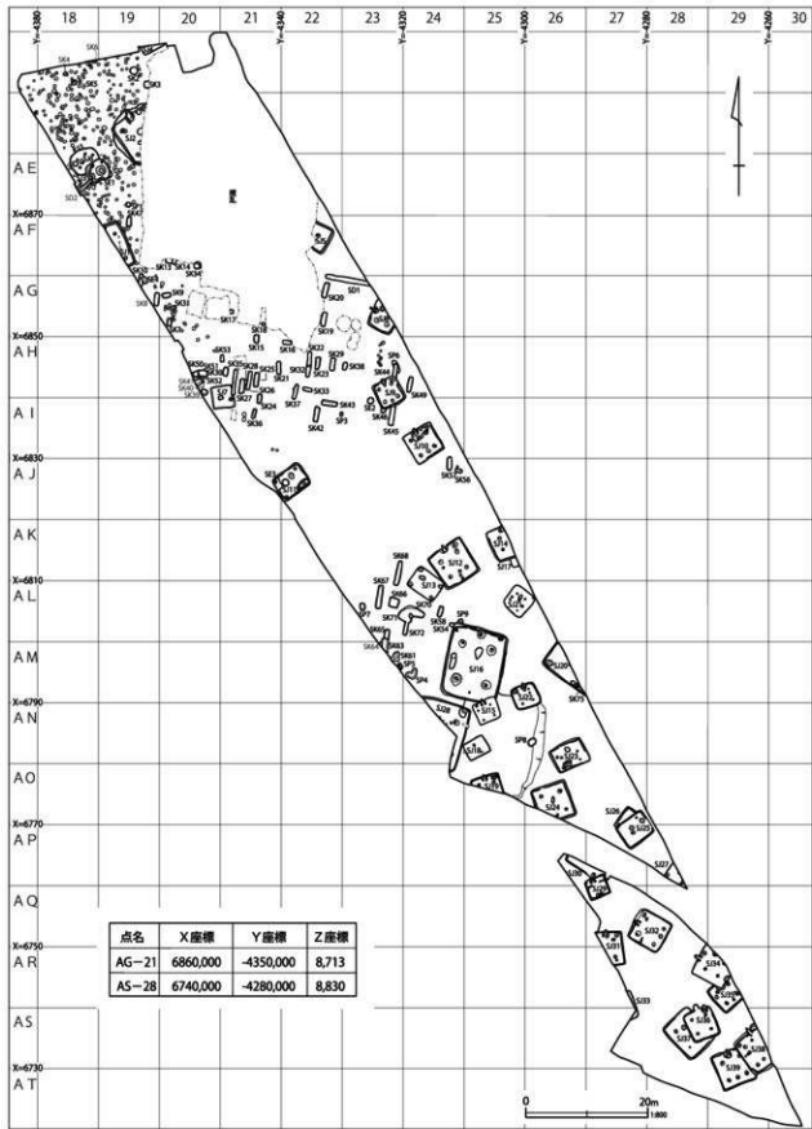
古墳時代の竪穴住居跡の時期別内訳は、前期は1軒、中期は1軒、後期は6軒、7世紀以降は12軒である。

竪穴住居跡は重複関係が少なく、一部の竪穴住居跡は掘り込みの深さが0.7m前後と、非常に深い。また、カマドをもつ竪穴住居跡では、カマドは壁面を浅く掘り込み、煙道が短く、粘土を構築材に用いる例が多いことが特徴的である。

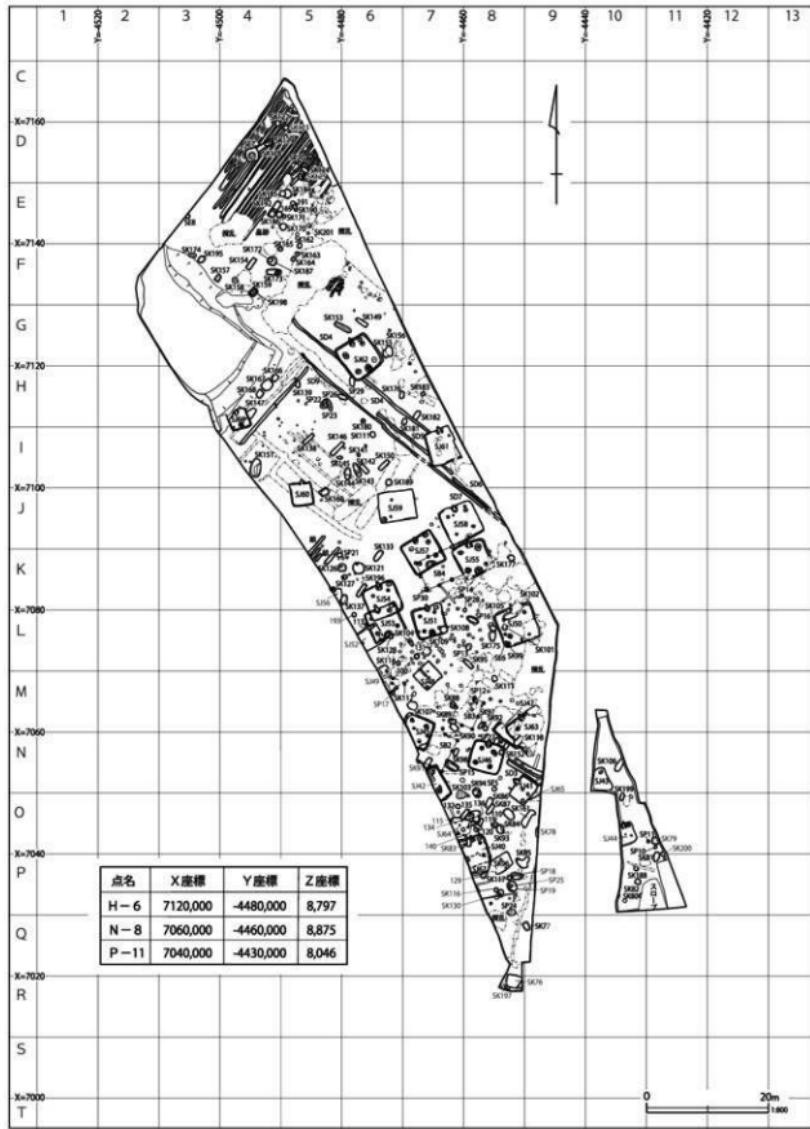
土器の傾向は、古墳時代から奈良時代にかけて、土師器は埼玉県域に加えて、千葉県域や茨城県域、栃木県域に系譜をもつ例が含まれる。



第2図 横野地北遺跡と目沼古墳群周辺の遺跡と地形



第3図 槙野地北遺跡第3次調査区全体図



第4図 桃野地北遺跡第4次調査区全体図

特に古墳時代後期以降は、壺類にヘラミガキと漆や炭素吸着を施した個体が多く、器形は須恵器・壺身模倣壺と半球形壺の多い点が特徴的である。これらの特徴は栃木県域の集落と類似点が多い（梁木・田熊 1989、内山 2013 等）。

また、土師器全体に指摘できる傾向として、厚手でゆがみの顕著な個体の多いことが挙げられる。そのため、一軒の竪穴住居跡の床面直上から出土した同時期の土器であっても、個体差が大きい。こうした特徴は埼玉県域よりも東関東（栃木・茨城・千葉県域）に共通する傾向にあり、近隣では栃木県佐野市の集落遺跡（ゴロノミヤ遺跡・傾城塚遺跡等）においても指摘されている（中村 2016）。一方、須恵器は古墳時代の竪穴住居跡からの出土点数は少ないが、第 36 号住居跡では群馬県東毛地域（太田金山窯か）の壺などが出土している。奈良時代以降の竪穴住居跡から出土する須恵器は、埼玉県内の主要窯である鳩山町周辺の南比企窯や寄居町末野窯の製品は認められない。その代わりに、栃木県三毳窯、茨城県新治窯、静岡県湖西窯といった、遺跡周辺の他地域産製品や遠方の製品が確認できる。

このように、土師器・須恵器からみると、楨野地北遺跡は埼玉県内の遺跡ではあるが、東関東の特徴が強いといえよう。その背景には、楨野地北遺跡が下総台地北西部に立地し、利根川と古利根川を介して様々な地域と接続していることも推定される。

1-2 集落の変遷

楨野地北遺跡第 3 次・第 4 次調査区では合計 67 軒の竪穴住居跡が検出された。そのうち、縄文時代に帰属する第 6・21・64 号住居跡、時期不詳の第 4 号住居跡を除き、63 軒の住居跡は古墳時代から奈良時代、そして平安時代にかけて営まれた集落跡と判断した。

報告書では、古墳時代前期から平安時代までを

1～9段階に分けて変遷をまとめた。そのうち、ここでは目沼古墳群とおおよそ対応する 3段階から 6段階の様相について、改めて取り上げたい（第 1 表・第 5 図・第 6 図）。なお、1段階は古墳時代前期、2段階は古墳時代中期前半、7段階は 7世紀後半、8段階は奈良時代前半、9段階は平安時代に当たる。

3段階

第 3 次調査区では 3 軒がみられる（第 23・24・25 号住居跡）。これらは同時期ではなく、若干の時期差が考えられるため、1 軒ずつ推移したと想定すると、住居数は少ない。3段階では竪穴住居跡にカマドはまだみられず、炉を使用している。

そのうち、第 25 号住居跡は 3段階では最も出土点数が多く、一括性が高い。土師器の壺・壺類・高环・小型壺・小型甕・大型甕・小型甕・大型甕で構成され、赤彩を施す個体が多い。

3段階は田中祐樹氏による杉戸町大堀荒田遺跡第 1 期に対応する（田中 2013）。楨野地北遺跡では田中祐樹氏の指す「ヘルメット形土器」はそれほど多く出土していないが、深身の壺甕類が出土した。周辺遺跡との比較から、3段階は 5 世紀中葉～後葉と想定した。

4段階

第 3 次調査区では 3 軒（第 7・12・31 号住居跡）、第 4 次調査区では 3 軒（第 43・54・61 号住居跡）がみられる。

第 7 号住居跡は炉を使用しているが、その後の住居跡にはカマドが導入される。カマドの導入は、埼玉県北の児玉地域に比べて遅れる点が特徴的である。カマドの構造は基本的に北側に面する壁面を掘り込み、粘土を用いて構築する例が多く、4段階以降、この構造が共通する。竪穴住居跡は依然として散在する状況だが、住居軒数は僅かに増加する。竪穴住居の平面は、3段階で隅丸長方形だったが方形となる。カマドが導入される点や

第1表 横野地北遺跡における3段階から6段階における竪穴住居跡の概要

No.	段階	次数	遺跡名	主軸方向	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	カマド・炉	カマド構築材
1	3段階	3次	第23号住居跡	N-24°-W	5.83	4.67	0.76	印	—
2	3段階	3次	第24号住居跡	N-20°-W	6.32	6.18	0.48	印	—
3	3段階	3次	第25号住居跡	N-34°-E	5.35	4.47	0.37	印	—
4	4段階	3次	第7号住居跡	N-82°-E	3.78	3.74	0.39	印	—
5	4段階	3次	第12号住居跡	N-36°-W	6.60	6.60	0.60	カマド	粘土
6	4段階	3次	第31号住居跡	N-9°-W	5.75	(4.23)	0.58	カマド	粘土
7	4段階	4次	第43号住居跡	N-27°-W	(4.11)	(3.05)	0.48	—	—
8	4段階	4次	第54号住居跡	N-22°-W	5.73	5.57	0.49	カマド	粘土
9	(4段階)	4次	第61号住居跡	N-18°-W	5.86	5.11	0.25	カマド	粘土
10	5段階	3次	第9号住居跡	N-27°-W	4.75	4.46	0.50	カマド	粘土
11	5段階	3次	第10号住居跡	N-32°-W	5.36	5.33	0.58	カマド	粘土
12	(5段階)	3次	第14号住居跡	N-22°-W	5.58	(3.34)	0.79	カマド	粘土
13	5段階	3次	第15号住居跡	N-23°-W	4.07	3.70	0.16	カマド	粘土
14	5段階	3次	第32号住居跡	N-60°-W	6.09	5.57	0.56	カマド	粘土
15	(5段階)	3次	第33号住居跡	N-19°-W	(4.71)	(1.84)	0.77	—	—
16	5段階	3次	第35号住居跡	N-41°-W	(4.97)	(4.87)	0.61	—	—
17	5段階	3次	第36号住居跡	N-26°-W	5.28	4.85	0.75	カマド	粘土
18	5段階	3次	第38号住居跡	N-36°-W	7.53	(5.05)	0.76	カマド	粘土
19	5段階	3次	第39号住居跡	N-23°-W	6.16	5.91	0.67	カマド	粘土
20	5段階	4次	第44号住居跡	N-20°-W	3.47	(2.80)	0.56	カマド	粘土
21	5段階	4次	第49号住居跡	N-27°-W	(4.62)	(1.56)	0.37	カマド	粘土
22	5段階	4次	第56号住居跡	N-3°-E	(3.06)	(2.08)	0.24	カマド	粘土
23	6段階	3次	第19号住居跡	N-73°-E	4.88	(3.92)	0.73	カマド	粘土
24	6段階	3次	第22号住居跡	N-18°-W	4.36	3.98	0.40	カマド	粘土
25	6段階	3次	第29号住居跡	N-20°-W	3.62	3.50	0.70	カマド	粘土
26	6段階	3次	第34号住居跡	N-62°-W	(5.90)	(5.48)	0.77	カマド	粘土
27	6段階	4次	第42号住居跡	N-30°-W	5.90	(2.44)	0.70	—	—
28	6段階	4次	第48号住居跡	N-44°-W	3.61	3.44	0.35	—	—
29	6段階	4次	第51号住居跡	N-15°-W	5.21	5.19	0.39	カマド	粘土・地山削り出し

土器の様相から、5段階へと継続する集落の形成
が始まった段階と推定される。

第7住居跡では壺・壺のほかに、覆土中から甕や甕も出土しており、基本的な構成は他の住居跡と変わらない。壺は壺蓋模倣壺(SJ7-1)と口縁部が大きく外反する壺(SJ7-2)がある。いずれも赤彩を施す。壺は球形で底部が突出する。

器種構成は土師器の壺・塊類・高壺・鉢・甕(小型甕・中型甕・球胴甕・長胴甕)、甕(甕形・鉢形)が基本となり、須恵器の蓋壺や高壺が客体的にに入る。土師器は総じて厚く、重い点が特徴である。代表例として第31号住居跡が挙げられる。

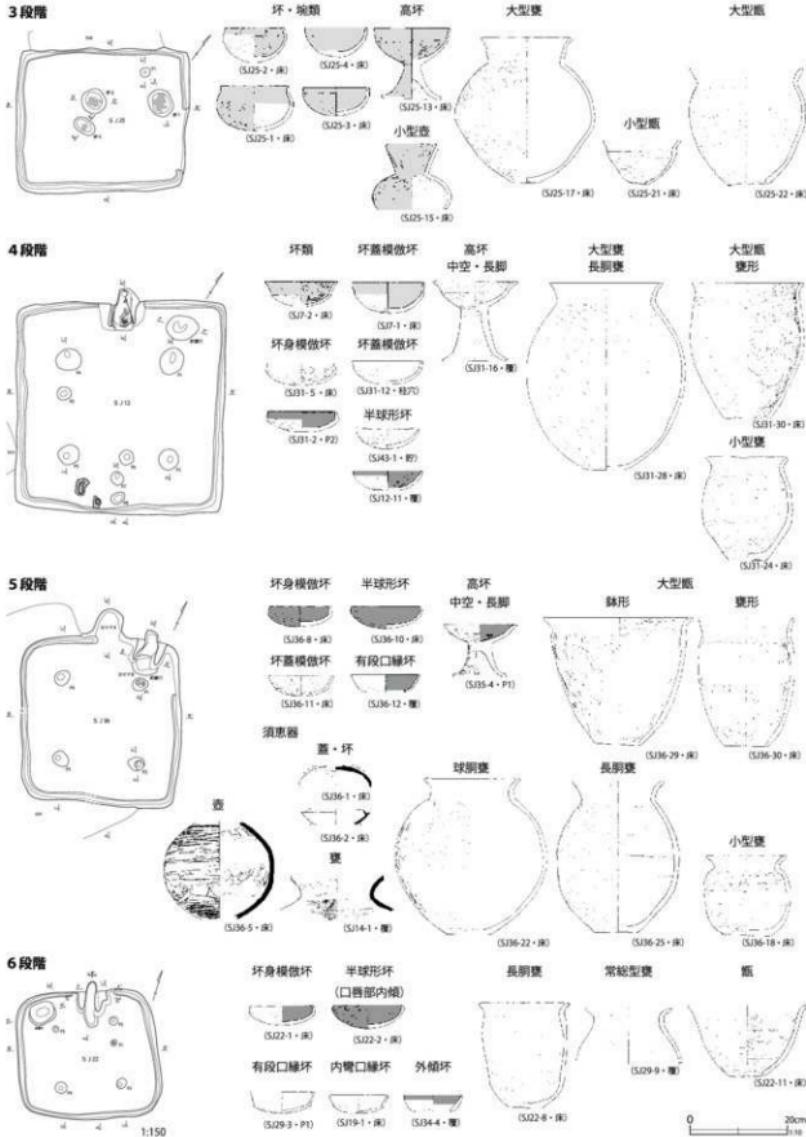
4段階は田中祐樹氏による大堀荒田遺跡第II期～第III期に対応する。SJ7-2・3は、大堀荒田遺跡第4号住居跡(11・15)と、内面調整を除いた器形や赤彩の特徴が共通する。ただし、大堀荒田遺跡では环身模倣壺は少ない。周辺遺跡との比較から、4段階は6世紀前葉～中葉と想定した。

5段階

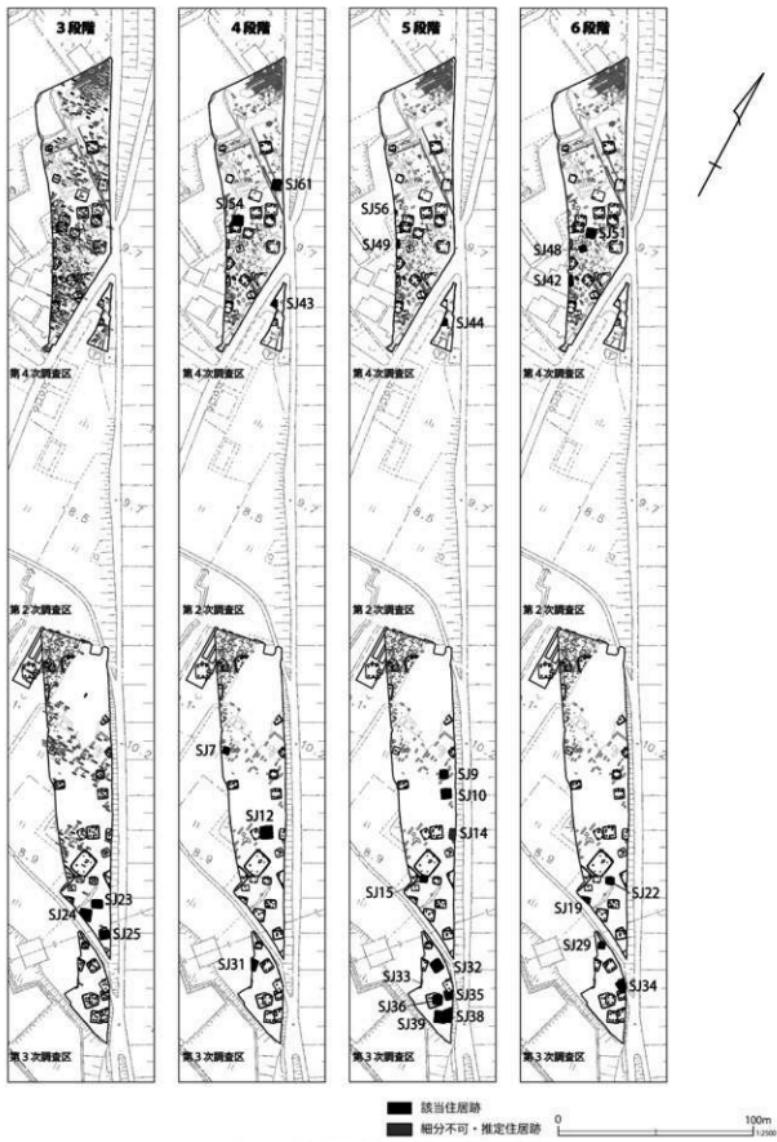
第3次調査区では10軒(第9・10・14・15・32・33・35・36・38・39号住居跡)、第4次調査区では3軒(第44・49・56号住居跡)がみられる。4段階に比べて住居軒数が増加し、集落変遷の中でも最大のピークを迎える。第3次調査区では南側に集中し、互いに隣接しつつ集落が営まれる。ただし、第38号住居跡と第39号住居跡は重複関係にあり、第39号住居跡が先行する。竪穴住居には掘り込みの深いものも増加する。

器種は4段階の構成に加えて、須恵器の甕や甕類が客体的にに入る。代表例として第36号住居跡が挙げられる。

5段階は田中祐樹氏による大堀荒田遺跡第IV期と福田聖氏による杉戸町宮の腰遺跡第1段階・第2段階に対応する(福田2003)。环身模倣壺が増え、長胴甕に球胴形と長胴化の進む個体が混在



第5図 横野地北遺跡3段階～6段階における竪穴住居跡と土器の変遷



第6図 横野地北遺跡3段階～6段階の集落

する。周辺遺跡との比較から、5段階は6世紀後葉～末と想定した。

6段階

第3次調査区では4軒（第19・22・29・34号住居跡）、第4次調査区では3軒（第42・48・51号住居跡）がみられる。第3次調査区の竪穴住居跡は、住居軒数は減少するものの、これらは前段階と同じく南側に集中する。

器種構成は新たに常総型壺（佐々木2007）が加わり、塊・高坏・小型・中型壺が減少する。

第22号住居跡では、利根川流域の転石と想定される角閃石安山岩の砥石と、群馬県南牧村砥沢産の流紋岩の砥石が出土した。

6段階は福田聖氏による宮の腰遺跡第3段階に対応する（福田2003）。周辺遺跡との比較から、6段階は7世紀前半と想定した。

以上、横野地北遺跡について、主に古墳時代中期後半から7世紀前半までの様相を概観したが、土器は東関東系の特徴が強いことが大きな特徴として挙げられる。一方、角閃石安山岩の砥石や流紋岩の砥石の出土は、上野地域との交流も推定させる。また、横野地北遺跡からは塩の生産と移動に関わるとされる貝巣穴痕泥岩も数点出土した（坂本2015）。ここから東京湾沿岸地域との交流も推定される。

2 目沼古墳群について

2-1 目沼古墳群の研究動向

目沼古墳群は、埼玉県杉戸町目沼に所在する。かつては「九十九塚」と呼ばれるほど古墳が密集していたとされるが、現在は杉戸町内に、26基の古墳が残るに留まる。目沼古墳群は、すでに大谷徹氏や田中祐樹氏により詳細に検討されているため、詳細はそちらを参照していただきたい（大谷2003、大谷2013、田中祐2017等）。

近年、田中瑞木氏を中心に、杉戸町教育委員会と埼玉大学に保管されていた埴輪（目沼7号墳、

伝目沼8号墳、三友國五郎コレクション）の報告が行われた（田中瑞2014、田中祐・田中瑞2015、田中瑞2015）。

また、宮村誠二氏は、埼玉県内の埴輪棺墓を集成し、それらを検討した結果、埴輪棺墓の被葬者は埴輪製作集団と関係が想定される乳幼児や小児であり、埴輪棺はその職掌を象徴する器物として採用されたと説く（宮村2015）。宮村氏が想定した被葬者像は、埴輪棺長から導き出されたもので、被葬者像の検討が進展していない埼玉県内の古墳研究では、数少ない研究である。宮村氏の集成には、目沼10号墳埴輪棺墓も取り上げられている。目沼10号墳は、古墳時代中期末～後期初頭に位置づけられ、現状では古墳群造営の嚆矢となつた古墳である。

そして田中祐樹氏は、最新の調査である目沼23・25・26号墳の成果を踏まえ、目沼古墳群全体の再検討を行った（田中祐2017）。なお、目沼23・25・26号墳の調査成果は、2017年3月に刊行された（井上ほか2017）。

田中祐樹氏による最新の検討では、目沼古墳群の造営は、10号墳と23号墳の調査成果から古墳時代中期末～後期初頭（5世紀末～6世紀初頭）に開始される。ただし、古墳群内における古墳時代前期の土師器の出土量、および目沼西遺跡における当該期の住居跡の検出から、目沼古墳群の成立が前期に遡る可能性も指摘している。

一方、古墳群の範囲は、古墳群南方の杉戸町宮前前原遺跡における下縦型埴輪の出土、および古墳群北方の幸手市横野地地区の陸田用水路側壁に、加工痕のある緑泥石片岩が使用されている点から、現状よりも南北に広がっていた可能性を説く。

田中氏も説くように、現状における目沼古墳群の成立が、古墳時代中期末～後期初頭に位置づけられることは、大谷徹氏の検討以降、おおよその共通見解となっている。しかし、絶対年代の位置

づけについては、出土資料が少ない現状では、それを確実視することは危うさも秘めている。資料の増加の度に再検討する姿勢が必要だろう。

また、古墳群の成立が前期に上がる可能性については、田中氏が挙げた目沼西遺跡や杉戸町上椿遺跡に加えて、前述した楨野地北遺跡でも、当該期に集落の形成が確認できる点から、その可能性はないとは言い切れない。しかし、古墳群そのものの調査成果から判断できない現状では、慎重にならざるを得ない。このような調査と研究の状況は、東松山市における五領遺跡・反町遺跡と野本将军塚古墳との関係に似通う。五領遺跡や反町遺跡では、発掘調査により古墳時代前期の集落跡が確認されたものの、野本将军塚古墳は長らく時期を確定できなかった。近年の墳丘の再測量やレーダー探査を経て、より確実に前期古墳と推定されるようになったのである（城倉・伝田・青木編2017）。

古墳群の範囲に関しても同様に、宮前前原遺跡における下縦型埴輪の出土と、用水路における石材の確認という点だけでは、古墳群の範囲を現状よりも広げるには判断材料が少ないだろう。目沼古墳群は、たしかにかつて「九十九塚」と呼ばれたように、多くの古墳が分布していたと考えられるが、やはり調査による遺構・遺物の確認をもって古墳群の範囲は設定するべきだろう。

2-2 目沼古墳群の変遷

以上を踏まえつつ、ここでは大谷氏と田中氏の変遷観を取り上げ、古墳の動向を見直したい（第2表・第7・8図）。

大谷Ⅰ期・田中1期

南支群の10号墳と北支群の23号墳が該当する。10号墳は墳長46m以上の前方後円墳で、武藏系埴輪をもつ。埋葬施設は竪穴式石室と推定され、周溝からは埴輪棺も検出された。23号墳は径9.5mの円墳で、墳丘は残っていないが、

遺構確認面上の周溝寄りに粘土櫛が見つかった。粘土櫛は残存状況から舟形木棺と推定されている（第8図）。年代は出土遺物から5世紀末～6世紀初頭とされる。

大谷Ⅱ期・田中2期

北支群の8号墳と9号墳、南支群の19号墳と20号墳が該当する。8号墳は径23～24mの円墳で、武藏系埴輪が出土した。埋葬施設は木棺直葬2基が検出された。9号墳は径25mの円墳で、埴輪は出土していない。埋葬施設は木炭櫛（削竹形木棺）が検出された。副葬品に三鈴杏葉をはじめ、多数の遺物が出土した。19号墳と20号墳は詳細が明らかでないが、19号墳から出土した円筒埴輪が、武藏系埴輪であることが大谷氏により明らかにされた（第8図）。年代は出土遺物から6世紀前半とされる。

大谷Ⅲ期・田中3期

北支群の7号墳、南支群の11号墳が該当し、4号墳も当該期と推定されている。7号墳（瓢箪塚古墳）は墳長47mの前方後円墳で、下縦型埴輪が出土した。埋葬施設は砂岩を用いた横穴式石室と推定されている。11号墳は径28mの円墳で、下縦型埴輪が出土した。埋葬施設は木棺直葬と推定されている。4号墳は径20mの円墳で、埴輪は出土記録のみが残る。埋葬施設は木棺直葬と推定されている。

大谷Ⅲ期・田中3期は古墳に並べられる埴輪が、武藏系埴輪から下縦型埴輪へと変化した時期として注目されている。また、古墳群内から房州石が見つかっており、房州石を用いた埋葬施設（横穴式石室か）をもつ古墳の存在が想定されている。房州石を利用する横穴式石室は、埼玉県内では埼玉将军塚古墳で確認されている。この房州石の存在は、埼玉古墳群への石材の搬入経路が、庄内古川・太日川を介したことを傍証する重要な資料である。年代は出土遺物から6世紀中葉～後葉とされる。

大谷IV期・田中4期

北支群の2号墳と14号墳が該当する。2号墳は墳長43mの前方後円墳で、埴輪は出土していない。埋葬施設は角閃石安山岩を用いた横穴式石室である。出土した須恵器は、大谷氏により報告され、東海産を含むことが指摘されている（第8図）（大谷2013）。14号墳は円墳で埴輪は出土記録のみが残る。埋葬施設は角閃石安山岩を用いた横穴式石室である。こうした角閃石安山岩を用いた横穴式石室は、群馬県榛名山におけるHr-FP降下後、利根川流域に分布し、増加する。年代は6世紀末葉～7世紀初頭とされる。

大谷V期・田中5期

北支群の3・6・17号墳が該当する。3号墳は径20mの円墳で、埋葬施設は角閃石安山岩削石積胸張形石室である。この角閃石安山岩は、秋池武氏によると庄内古川に分布する転石を利用したとされる（秋池2000）。また、玄門部の石材加工（「四」字形の加工）から、緑泥片岩を玄門に使用していたことが想定される。緑泥片岩の存在から、石材を荒川上流域から入手した可能性が想定される。6号墳は径23mの円墳で、埋葬施設は凝灰質砂岩の横穴式石室とされるが、石材の詳細は明らかではない。凝灰質砂岩は目沼古墳群周辺では獲得できない。そのため他地域から入手したことが想定されるが、その候補地は比企地域の凝灰岩、大宮台地の硬砂層、千葉県の凝灰質砂岩など複数あるため即断できない。17号墳は径20mの円墳で、横穴式石室とされるが詳細は不明である。年代は7世紀前葉以降とされる。

3 横野地北遺跡と目沼古墳群の関係

3-1 両遺跡の成立と変遷

これまでの横野地北遺跡と目沼古墳群の概観に基づき、両遺跡の対応関係に注目したい。

まず、古墳時代前期については、横野地北遺跡では集落の形成が始まるが、目沼古墳群では明ら

かな前期古墳は見つかっていない。同じく、古墳時代中期前半から中葉にかけて、横野地北遺跡ではごく少数の住居跡が営まれるが、周辺で古墳は見つかっていない。

古墳時代中期後半に当たる横野地北遺跡3段階は、依然として調査区内で確認された住居軒数は少ない。第25号住居跡から出土した土器群は、千葉県域の特徴をもつ。これにおおよそ対応する目沼古墳群I期（1期）は、目沼10号墳で武藏系埴輪が出土している。土器の傾向と埴輪の傾向を同一視するべきではないが、両者の傾向が異なり、住居軒数も少ない現状では、3段階の様相を目沼古墳群造営の母体となる集落とは評価し難い。ただし、目沼23号墳の粘土櫛は埴丘中央ではなく、周溝寄りに位置する。これは田中氏が留意するように、常総地域に分布する「変則的古墳」の一一種とみなせるのであれば、23号墳の築造主体が東関東系に求められる可能性もある。今後、この時期の各地の埋葬施設の在り方について、再検討する必要があるだろう。

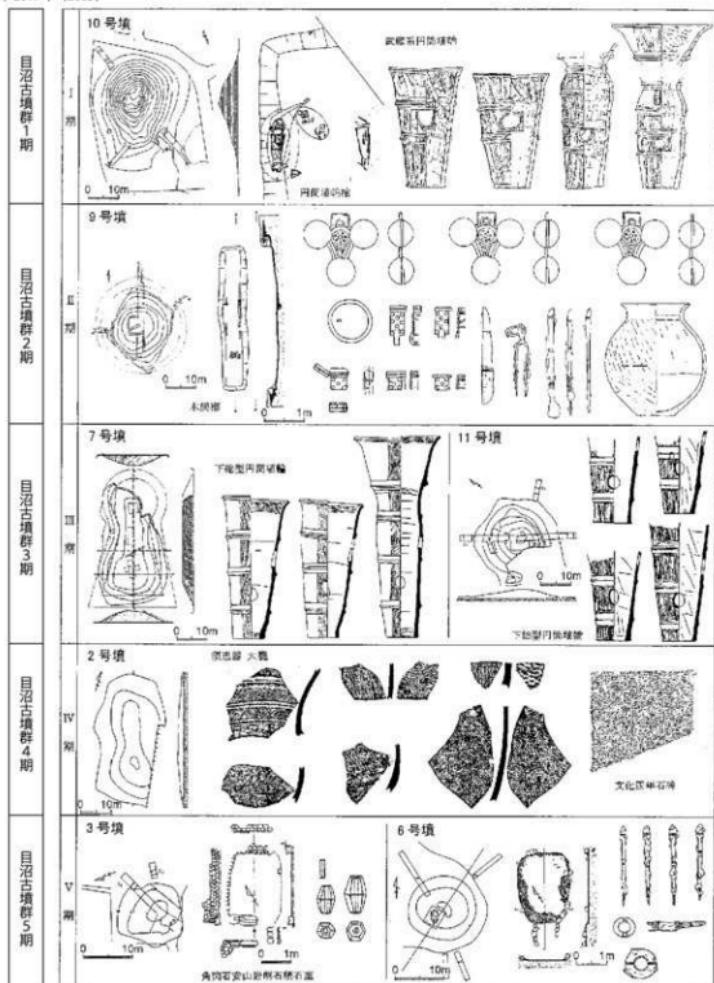
古墳時代後期前半に当たる横野地北遺跡4段階は、目沼古墳群2期とおおよそ対応する。横野地北遺跡の堅穴住居跡から出土した土器は、東関東系の特徴が強い反面、古墳は目沼8・19号墳の武藏系埴輪や9号墳の副葬品等、埼玉古墳群や北武藏地域との関係を色濃く示す。現状では4段階も3段階と同様に、目沼古墳群の母体となる集落と評価することは難しい。

古墳時代後期後半に当たる横野地北遺跡5段階は、目沼古墳群3期・4期におおよそ対応する。横野地北遺跡の集落は依然として東関東系の特徴が強いものの、利根川流域を介したと推定される東毛産の須恵器の出土などもみられる。目沼7・11号墳では下縦型埴輪が並び、古墳群内に房州石の横穴式石室の存在が想定されるなど、古墳群に下総地域や東京湾岸域との関係を示す特徴が認められるようになる。続く4期以降に造られる横

第2表 目沼古墳群時期ごとの古墳の概要

No.	時期 (田中祐 2017)	古墳名	支群	墳形	墳長	埴輪	埋葬施設	出土遺物 (大谷 2003・井上 2017)	文献
1	1期（5世紀末～6世紀初頭）	10号墳 (浅間塚)	南	前方後円	46～	【武藏系】円筒・形象（人物・馬・家）、埴輪棺	竪穴系石室か・埴輪棺（周溝）	—	(さきた主資料館編 1994)
2	1期（5世紀末～6世紀初頭）	23号墳	北	円	9.5	—	粘土櫛（舟形木船か）	刀子1、土製勾玉1、石製勾玉1、須恵器、土師器	(井上他 2017)
3	2期（6世紀前葉）	8号墳	北	円	23～24	【武藏系】円筒・(形象)	木棺直葬2	第1主体部：鉄鎌3・鉄環2・ガラス小玉34 第2主体部：直刀1	(横川他 1981) (田中祐・田中瑞 2015)
4	2期（6世紀前葉）	9号墳	北	円	25	—	木炭櫛（削竹形木船）	直刀1、刀子1、铁鎌11、三鈴杏葉3、铁製留金具7、铁製飾金具1、環状雲珠1、鍔子1、鉤金具3、須恵器	(横川他 1981)
5	2期（6世紀前葉）	19号墳	南	円	—	【武藏系】円筒	—	—	(大谷 2013)
6	2期（6世紀前葉）	20号墳	南	円	—	円筒（出土記録のみで詳細不明）	—	—	(大谷 2003)
7	3期（6世紀中葉～後葉）	7号墳 (瓢箪塚)	北	前方後円	47	【下縦型】円筒・朝顔・形象（人物）岩	竪穴系石室（砂岩）	鉄鎌	(大塚 1957) (森 1973) (田中瑞 2014)
8	3期（6世紀中葉～後葉）	11号墳	南	円	28	【下縦型】円筒・形象	木棺直葬か	土師器	(柳田他 1964) (森 1973)
9	(3期)	4号墳	北	円	20	円筒・形象（人物） (出土記録のみで詳細不明)	木棺直葬か	鉄釘	(蚊爪 1968)
10	4期（6世紀末～7世紀初頭）	2号墳	北	前方後円	43	—	横六式石室（角閃石安山岩）	須恵器大甕	(大谷 2003) (大谷 2013)
11	4期（6世紀末～7世紀初頭）	14号墳	北	円	—	出土記録のみで詳細不明	横六式石室（角閃石安山岩）	須恵器、土師器（伝承）	(大谷 2003)
12	5期（7世紀前葉以降）	3号墳	北	円	20	—	横六式石室（角閃石安山岩・緑泥石片岩）	碧玉製勾玉、水晶製切子玉、須恵器	(柳田他 1964)
13	5期（7世紀前葉以降）	6号墳	北	円	23	—	横六式石室（凝灰質砂岩）か	刀子、鉄鎌、不明鉄製品、耳環	(蚊爪 1968)
14	5期（7世紀前葉以降）	17号墳	北	円	20	—	横六式石室	—	(大谷 2003)
15	—	1号墳	北	円	—	—	—	—	(大谷 2003)
16	—	5号墳	北	円	16	—	木棺直葬か	—	(蚊爪 1968)
17	—	12号墳	南	円	19	—	木棺直葬か	—	(柳田他 1964)
18	—	13号墳	南	円	22.5	—	木棺直葬か	—	(柳田他 1964)
19	—	15号墳	北	円	—	円筒（出土記録のみで詳細不明）	—	須恵器（伝承）	(大谷 2003)
20	—	16号墳	北	円	—	—	—	—	(大谷 2003)
21	—	18号墳	北	円	—	出土記録のみで詳細不明	—	須恵器、土師器（伝承）	(大谷 2003)
22	—	21号墳	北	前方後円	—	—	—	—	(埼玉県教育委員会 1986)
23	—	22号墳	北	円	—	—	—	—	(埼玉県教育委員会 1986)
24	—	24号墳	北	円	—	—	—	—	(大谷 2003)
25	—	25号墳	北	円	15	—	—	土師器	(井上他 2017)
26	—	26号墳	北	円	14	—	—	土師器	(井上他 2017)

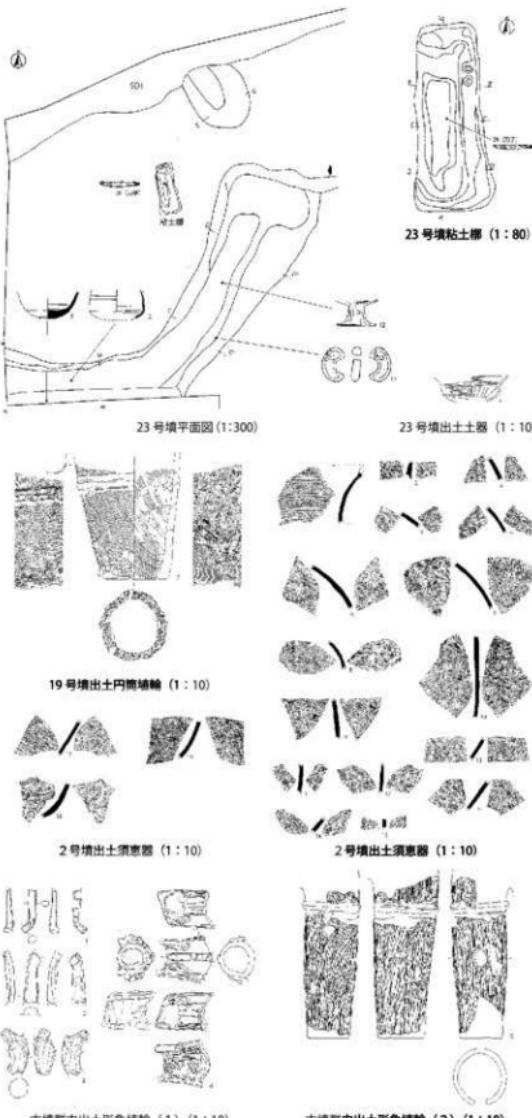
(田中祐) (大谷)
2017 2003



第7図 目沼古墳群の変遷



第8図 目沼古墳群の変遷と近年の新出資料



穴式石室は、角閃石安山岩を用いる例が主体となり、利根川流域の地域との関係も窺わせる。

7世紀前半に当たる楳野地北遺跡6段階は、目沼古墳群5期におおよそ対応する。第22号住居跡では、角閃石安山岩の砥石や流紋岩の砥石など、利根川流域の転石利用や西毛地域との関係を窺わせる遺物が出土している。

これに対し、目沼3号墳では角閃石安山岩削石積石室が造られる。秋池氏の研究では、幸手市(杉戸町)周辺の角閃石安山岩転石は5cm前後を最大径とする(秋池2000)。そのうえで目沼3号墳の転石は、庄内古川から獲得したと想定している。転石の最大径が目沼3号墳横穴式石室の石材よりも小さいことは、古墳築造後も河川では水流により磨滅が進むことと、石材の採取と利用が継続したことを理由に挙げている。楳野地北遺跡第22号住居跡で出土した角閃石安山岩の砥石は長さ9.7cmあるが、同様の観点から考えると近隣の庄内古川から獲得したと想定される。

また、目沼3号墳の横穴式石室では、角閃石安山岩を加工しており、その加工技術を保有していたことが窺われる。楳野地北遺跡で少数ではあるが砥石が出土した点は、鉄製品(刃物類)を所有していたことが推定される。その鉄製品を何に利用したかは明らかにできないが、可能性の一つとして石材加工も挙げておきたい。

目沼古墳群では7世紀後半以降の古墳は確認されていない。一方、楳野地北遺跡では集落が繼續し、竪穴住居の集中する箇所は、第3次調査区から第4次調査区へと移行するものの、住居軒数の減少は認められない。古墳群の終焉が集落における画期とは必ずしもなりえないことを示唆している。

3-2 両遺跡にみる本地域の再評価

楳野地北遺跡の発掘調査の結果、今後、出土資料をもとに検討を深める必要があるものの、埼玉

県東部における古墳時代～奈良時代の様相がより具体的に明らかになったといえよう。ただし、発掘調査を実施した範囲は、遺跡全体の1割に満たない。検出遺構数は調査面積に左右されるため、今回の成果はあくまで2017年現在までのものということを留意しておきたい。

現状における楳野地北遺跡と目沼古墳群との関係は、楳野地北遺跡3・4段階(目沼古墳群1期・2期)には住居軒数も少なく、古墳築造の母体とみなせる状況ではない。その後、楳野地北遺跡5・6段階(目沼古墳群3期以降)は、住居軒数が増加し、古墳の築造に関わった可能性も想定できるだろう。古墳の築造にどれだけの数の集落が関わったのか、これを具体的に明らかにすることは難しい。集落遺跡における住居軒数の推移や、出土遺物の特徴等を踏まえて推定していく必要があるだろう。今後、楳野地北遺跡と目沼古墳群周辺については、杉戸町椿遺跡群など周辺の遺跡も含めて検討を積み重ねていく必要がある。

その一方で、古墳と集落の関係を推定できるモデルとなる遺跡群や地域も見出していく必要がある。すなわち、古墳の築造に関する理論面の整理を進めつつ、今回取り上げたような地域の遺跡を取り上げて検討する作業が求められる。

近年、埼玉県東部や北部の県境地域(利根川・古利根川流域)では、集落遺跡の調査成果が上がっている。

羽生市屋敷裏遺跡は利根川流域に位置し、古墳時代の竪穴住居跡が約70軒検出された。中には脚付長頸壺に代表される東毛産(太田金山窯か)須恵器が出土した。近隣に村君古墳群永明寺古墳が位置することから、両者の関係が注目される(福田2016)。

宮代町道仏遺跡は大落古利根川流域に位置し、古墳時代の竪穴住居跡が約150軒検出された。特徴的な遺物として、韓式系軟質土器や群馬県産須恵器などが出土した(青木秀編2017)。近隣

に姫宮神社古墳群が位置するが、古墳群の具体像が明らかではない（利根川 2002）。

利根川流域では、各地の発掘調査で点的な成果が上がっており、それらを面的に検討することも今後重要な位置を占める分析となるだろう。

おわりに

本稿では埼玉県東部で新たに調査・報告のされ

た楨野地北遺跡の成果を紹介するとともに、近傍に位置する目沼古墳群との関係について検討した。楨野地北遺跡から出土した遺物に関する分析は、その系譜関係や器種構成の地域比較等、さらに検討を深めていく必要がある。

古墳と集落の関係については予察に留まつたが、個々の遺跡の分析を深めつつ、それらを総合したモデルの構築を目指していきたい。

引用・参考文献

- 青木秀雄・河井伸一 2017 『道仮遺跡』宮代町文化財調査報告書第23集 宮代町教育委員会
- 青木 弘 2015 『埼玉県における群集墳の展開』『群集墳展開の共通性と地域性—王権・地域首長と群集墳被葬者—』 第21回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 pp.95-114 第21回東北・関東前方後円墳研究会大会実行委員会
- 青木 弘 2017 『楨野地北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第434集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 秋池 武 2000 「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義—榛名山給源の多孔質の角閃石安山岩転石—」『群馬県立歴史博物館紀要』第21号 pp.35-60 群馬県立歴史博物館
- 井上純子他 2005 『宮前原遺跡—第1次・第2次調査—』杉戸町文化財調査報告書第12集 杉戸町教育委員会
- 井上純子他 2017 『町内遺跡発掘調査V（杉内遺跡第3次・第4次調査・目沼古墳群・目沼西遺跡第3次調査・宮の腰遺跡第VI次調査）』杉戸町文化財調査報告書第23集 杉戸町教育委員会
- 犬木 努 2014 「下総型埴輪の螢光X線分析—胎土分析と埴輪生産組織論—」『埴輪研究会誌』第18号 pp.74-97 塩輪研究会
- 内山敏行（編） 2013 『東谷・中島地区遺跡群14 権現山遺跡南部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区）・磯岡遺跡（SG9区）』栃木県埋蔵文化財調査報告第360集 とちぎ未来づくり財團埋蔵文化財センター
- 大谷 徹 2003 「5 目沼古墳群とその時代」『杉戸町史』考古資料編 pp.319-334 杉戸町役場（町史編さん室）
- 大谷 徹 2013 『杉戸町目沼古墳群出土の埴輪・須恵器について—「下総型埴輪」に伴う馬形埴輪の検討—』『埴輪研究会誌』第17号 pp.93-109 塩輪研究会
- 大塚初重 1957 『埼玉県北葛飾郡瓢箪塚古墳』『日本考古学年報（昭和27年度）』5 日本考古学協会
- 蚊爪良祐 1968 『杉戸町目沼古墳群4・5・6号埴輪発掘調査報告』『埼玉考古』第6号 埼玉考古学会
- 小暮岳室 2011 「荒川低地へ向かった後期新世の利根川旧流路—妻沼低地における旧流路の復元—」『地学雑誌』120（4） pp.585-598 東京地学協会
- 埼玉県 1988 『新編埼玉県史』通史編
- 埼玉県教育委員会 1986 『埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』
- 埼玉県立さきたま資料館編 1994 『埼玉県古墳群詳細分布調査報告書』 埼玉県教育委員会
- 坂本和俊 2015 「古墳時代東国の土器を使わない製塩と塩の流通痕跡」『埼玉考古』50 pp.119-126 埼玉考古学会
- 佐々木義則 2007 「常陸型甕の生産と流通—奈良時代以前の様相—」『斐良岐考古』第29号 pp.158-175 斐良岐考古同人会
- 砂生智江 2016 『楨野地原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第419集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳（北埼玉・南埼玉・北葛飾）』さきたま出版会
- 城倉正祥・青木 弘・伝田郁夫編 2017 『デジタル技術を用いた古墳の非破壊調査研究—墳丘のデジタル三次元測量・

G P R、横穴式石室・横穴墓の三次元計測を中心にして』早稲田大学東アジア
アズ都城・シルクロード考古学研究所 早稲田大学文学部考古学コース

- 杉戸町教育委員会・埼玉大学教養学部 2013 『ハニワの里帰り一目沼ひょうたん塚古墳の埴輪たち』
- 田中瑞木 2014 「埼玉大学所蔵杉戸町目沼7号埴出土円筒埴輪の検討」『埼玉考古』49 pp.37-44 埼玉考古学会
- 田中瑞木 2015 「埼玉大学所蔵「三友國五郎コレクション」の円筒埴輪について」『埼玉考古』50 pp.111-117 埼玉考古学会
- 田中祐樹 2013 「大堀新田遺跡—第1次・第2次調査—」杉戸町文化財調査報告書第18集 杉戸町教育委員会
- 田中祐樹 2014 「杉戸町上椿遺跡出土土器の再検討—中川低地における古墳時代中後期理解のための基礎作業—」『埼玉考古』49 pp.45-58 埼玉考古学会
- 田中祐樹 2017 「目沼古墳群の動態について—近年の調査成果を踏まえて—」『土曜考古』第39号 pp.1-14 土曜考古学研究会
- 田中祐樹・田中瑞木 2015 「伝・目沼8号埴出土埴輪の「再発見」—目沼古墳群における武藏系埴輪の新例—」『埼玉考古』50 pp.101-110 埼玉考古学会
- 轟 俊二郎 1972 『埴輪研究』第1冊
- 利根川章彦 2002 「第7章 姫宮神社古墳群とその周辺」『宮代町史』通史編 pp.110-115 宮代町
- 中村岳彦 2016 「栃木県・佐野地域における古墳時代後期集落の動態—地域考古学研究のための一試論—」『地域考古学』1号 pp.33-52 地域考古学研究会
- 梁木誠・田熊清彦 1989 「古代下野の土器様相(1)」『栃木県考古学会誌』第11集 pp.151-179 栃木県考古学会
- 福田 聖 2003 「1 古墳時代の遺構・遺物について」『宮の腰遺跡—第1次・第2次・第3次・第4次・第5次調査』杉戸町文化財調査報告書第7集 pp.81-86 杉戸町教育委員会
- 福田 聖 2016 『屋敷裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第422集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮村誠二 2015 「埼玉県の埴輪柏原」『研究紀要』第29号 pp.37-50 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 柳田敏司他 1964 『杉戸町目沼遺跡』杉戸町教育委員会
- 横川好富他 1981 『目沼8・9号墳』杉戸町教育委員会
- 横川好富 1982 『下椿』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第18集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

図版出典

第1図 (青木2016)を再編集し、筆者作成。第2図 下図は国土地理院が提供する『基盤地図情報』に基づく。遺跡の位置は(青木2017)、目沼古墳群の古墳分布は(杉戸町2003)と(井上2017)に基づき、筆者作成。

第3図・第4図 (青木2017)を引用。第5図・第6図 (青木2017)を引用・変更。第7図 (大谷2003)を引用・変更。第8図 分布図は(杉戸町2003)と(井上2017)に基づき筆者作成。目沼23号墳は(井上2017)、目沼2・19号墳は(大谷2013)を引用・変更。第1表 (青木2017)に基づき筆者作成。第2表 (大谷2003)(井上2017)(田中祐2017)に基づき筆者作成。

研究紀要 第32号

2018

平成30年3月13日 印刷

平成30年3月16日 発行

発行 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 関東図書株式会社